
課題研究活動委員会企画シンポジウム 1

初年次教育における多様性にどう向き合うか

【日 時】 2021年9月11日（土）14:00～16:00 終了予定

【会 場】 Zoom によるオンライン開催（大会参加者には別途案内を差し上げます）

【タイム・スケジュール】

14:00～14:10 趣旨説明

14:10～14:35 話題提供 1 初年次教育における多様なニーズのある学生の理解と支援

—With コロナ時代の発達障害学生支援とは—

片岡 美華（鹿児島大学）

14:35～15:00 話題提供 2 グループワークの苦手な学生へのキャリア支援

—個人作業主体にワークシートを活用したキャリア教育の取組み—

山本 美奈子（山形大学）

15:00～15:25 話題提供 3 教員の多様性を活かした初年次教育のあり方

—思考を深めるアクティブラーニングに向けて—

井下 千以子（桜美林大学）

15:25～15:55 パネルディスカッション

15:55～16:00 まとめ

司会・趣旨説明・パネルディスカッション進行： 山田 剛史（関西大学）

【企画趣旨】

少子化に端を発する人口動態の変化やAIに代表される産業構造の変化が急速に進み、予測困難な時代を生きるこれからの大学生には、在学中に様々な力を身につけておくことが求められています。こうした社会変化を受け、大学教育改革においても3つのポリシーを軸に据えた教学マネジメントの実現、教育・学習方法としてのアクティブラーニング（AL）の推進が強く求められています。実際、様々な調査からもALの実施率は上昇しています。初年次教育においても、少人数のクラス編成でALを取り入れた形で授業がデザイン・実施されているケースが多くみられます。その中で、高校から大学への移行を円滑にするべく、アカデミック・スキルやソーシャル・スキルといった力の涵養が目標に据えられています。また、組織的な質保証を担保するための戦略・方略として、共通シラバスの策定や共通教材の利用なども展開されてきました。

初年次教育は、2000年代以降急速に拡大し、既に日本の大学教育のスタンダードとして定着するに至っています。一方で、この急速に進む社会変化に、今の初年次教育は十分に対応出来ているでしょうか（出口から見た初年次教育）。また、近年、初等・中等教育においても大学入学者選抜改革や学習指導要領の大幅な改定の中で、「主体的・対話的で深い学び」（大学で言うところのAL）や「社会に開かれた教育課程」の実現、「総合的な『探究』の時間」や「GIGA スクール構想（一人一台端末の実現）」など、大学入学前の学習者の経験やスキルが大きく変わってきています。この入学者の変化を適切に把握した上で、初年次教育が展開されているでしょうか（入口から見た初年次教育）。このような問題意識を背景としながら、初年次教育を次の段階に進めるための課題研究として「多様性」の問題に着眼し、ここに焦点化したシンポジウムを企画しました。

多様性はこれからの時代に不可欠かつ極めて重要なテーマです。これまでの初年次教育がどちらかと言うと標準化に軸を置くものだったように思いますが、今後はこの「標準性」と「多様性」の両軸から考えていくこと（どう調停するか）が重要になってくると考えます。とは言え、一言に多様性といっても様々なトピックが存在します。ここが焦点化されず多様性という言葉だけが独り歩きしているようにも感じます。そこで、本シンポジウムでは、発達障害を中心とした多様なニーズを有する学生（片岡氏）、グループワークが苦手な学生（山本氏）、さらに初年次教育に関わる多様な教員（井下氏）といった3つの観点から多様性を捉え、アクティブラーニングをキーとしながら初年次教育の現状や課題に迫りたいと考えます。

導入から一定期間が経ち、良い意味でも悪い意味でも「落ち着いて」きている段階にある初年次教育が、学生・教員の個性や多様性を大切にしながらより良いプログラムへと発展していくためにどんな視点や方法が考えられるのか。本シンポジウムを通じて参加者のみなさまと共有する機会を提供することができれば幸いです。

課題研究委員会委員 山田剛史（関西大学）

初年次教育における多様なニーズのある学生の理解と支援

——With コロナ時代の発達障害学生支援とは——

片岡 美華（鹿児島大学）

近年、発達障害児者への法整備や支援体制は目覚ましく発展しており、大学における発達障害学生支援もこれに漏れず、広く浸透してきた。多くは、修学支援センター（障害学生支援室等）を中心に心理的支援、学習・生活支援、環境整備などが行われている。とりわけ2016年に施行した「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（差別解消法）」は、障害者の権利条約に基づき不当な差別的取り扱いの禁止と合理的配慮の提供を大学も含めて国民に求めている。この合理的配慮の提供については、各大学でガイドラインを定め、配慮提供過程の整備や合理性の検討など含め事例の蓄積ができてきているであろう。初年次教育においても、入学時に要請し合理的配慮を含めた適切な支援を得ている学生もいれば、様々な理由から円滑に進んでいない学生もいる。例えば前者は、自分で特性を理解し、要支援を自覚、あるいは保護者や教職員との合議を経て配慮を得ている学生と言えるが、後者は当該学生の支援ニーズへの自覚が薄かったり、そもそも支援対象になりうるという発想がなかったりして合理的配慮に必要な「当事者からの要請」がなく、支援のプロセスに載りにくい学生であると言える。さらに後者の学生は概して出席や課題提出がうまくできず何度も単位を落とす、グループワークをすれば他学生から苦情が出るなどにより、教員側が対応を検討せざるを得ない場合もある。このように発達障害と言っても多様な学生がいる中で大学教職員が個人として、組織として何ができるかについて、以下を柱に報告を行う。

1. 初年次教育に関連した発達障害学生の特徴と理解
2. 困難さの背景と発達障害学生支援の在り方

とりわけ2については、発達障害学生が昨年度より広まった遠隔授業の影響を多大に受けていることから成否事例を含めて報告し、with コロナ時代の初年次教育についての検討材料としたい。

【プロフィール】

片岡 美華（かたおか みか）氏

鹿児島大学法文教育学域教育学系准教授。特別支援教育教員養成ならびに教職大学院を担当。2005年にオーストラリア、クィーンズランド大学でPh.D.取得。武庫川女子大学、佐保短期大学の非常勤職を経て2007年より現職に就く。著書『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー：「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践』（金子書房）、『発達障害・知的障害のある児童生徒の豊かな自己理解を育むキャリア教育：内面世界を大切にしたい授業プログラム45』（ジアース教育新社）ほか多数。幼保園の巡回相談や学校教員研修、就学支援など通じ当事者・保護者支援や特別支援教育の啓発など地域社会貢献も行う。

グループワークが苦手な学生のキャリア支援

——個人作業主体にワークシートを活用したキャリア教育の取組み——

山本 美奈子（山形大学）

キャリア教育において、主体的・対話的で深い学びの授業形態としてアクティブラーニングが推奨され（厚生労働省，2015），グループワークやディスカッションを取り入れた授業が活発に取組まれている。しかし，グループワークが苦手な学生も一定数，存在する。こうした学生の課題に対して，グループワーク以外の方法を検討したキャリア教育の研究報告は，殆どない。

本学では，こうした多様な学生に配慮し，グループワークや個人ワークを取入れた複数の授業形態のなかから学生が選択できるようにしている。本報告では，個人作業主体のワークシートを活用したキャリア教育が，学生の主体的・対話的で深い学びにつながっているかを検証した結果を報告する。ワークシートを活用し個人作業主体にしたのは，自分のキャリアを選択するプロセスには，自分と対話し，自分で決めていくことが重要だからである。

個人作業主体のワークシートを活用した授業運営は，①事例紹介，②キャリア理論の説明，③個人作業，④解説の4つで構成している。教員の解説は15分以内を目安にし，学生はキャリア理論を基に自分の経験を振り返り，事例を参考にワークシートを活用し考えて書く時間を授業全体の40～50%占めるように工夫している。

結果として，ワークシートを活用した個人作業主体のキャリア教育の授業は，自尊感情や進路選択自己効力が履修開始時に比べ，終了後は有意に向上していた。この結果は，筆者が報告^注したグループワークを主体にしたキャリア教育と同様の効果であることがわかった。当日は，これらの結果に加え，リフレクションシートの自由記述や課題の提出状況なども踏まえ，グループワークが苦手な学生のキャリア教育の在り方について考察したい。

注）山本美奈子・松坂暢浩・小倉泰憲（2019）「大学生の自己理解を促すキャリア教育-ARCSモデルを活用した授業運営の効果と検討-」『キャリアデザイン研究』

【プロフィール】

山本 美奈子（やまもと みなこ）氏

山形大学学術研究院（学士課程基盤教育機構）准教授。博士（ヒューマン・ケア科学）。園田学園女子大学，四條畷学園大学，独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構を経て，2017年より現職。主にキャリア教育やインターシップ教育を担当し，キャリアサポートセンターの進路・就職支援も兼任。

産学連携のキャリア教育支援，多様な学生への官学連携のキャリア就職支援など地域社会貢献に尽力。主な著書として『大学生のキャリアの可能性を広げる3つのワーク』（山形大学生協電子書籍）ほか。主な受賞歴として文部科学省「大学等におけるインターンシップ表彰」文部科学大臣表彰 最優秀賞受賞。

教員の多様性を活かした初年次教育のあり方 ——思考を深めるアクティブラーニングに向けて——

井下 千以子（桜美林大学）

平成28年に文部科学省が公表した「高大接続改革の全体像」では、初年次教育はアドミッションポリシー(AP)に対応した内容であること、またカリキュラムポリシー(CP)に沿って初年次教育を実施すべきであることが明示されており、初年次教育はAPとCPをつなげる要として、ディプロマポリシー(DP)も含めた3ポリシーに位置づけ捉えられている。

しかし、カリキュラムにおける初年次教育の位置づけを明瞭に理解したうえで授業を展開している教員はどれだけいるだろうか。初年次教育で培った力を学士課程カリキュラムに位置づけ、大学4年間の教育の一環としてどのように活かそうとしているかなど、初年次教育の成果が組織において十分に活用されているとは言い難い状況も見受けられる。

初年次教育は、本学会の貢献もあって、その重要性が認識され普及した。正課科目として教材も多数開発されてきている。一方で、ある程度のサイクルが出来上がると、あとは回していくだけというような形骸化も懸念され、理念と内実との乖離を踏まえ、新たな初年次教育のあり方を再考する段階に入ったと思われる。さらに、教授法としてのアクティブラーニングが急速に広まったことで、表層的な外的活動を煽る趨勢も散見される。

本報告では、こうした実情を俯瞰した上で、初年次教育担当者に限らず、担当外の教員も含め、教員の多様性を活かした初年次教育のあり方について、思考を深めるアクティブラーニングの観点から検討することを目的とする。

具体的には、事例として、桜美林大学における基礎教育の変遷を辿りつつ、開発した初年次教材の背景にある理念、専門科目との連関の試み、さらにはコロナ禍での学生の学びについて、アクティブラーニングを中核に据えて考察することとしたい。

【プロフィール】

井下 千以子（いのした ちいこ）氏

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授。慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科非常勤講師。京都大学大学院教育学研究科非常勤講師などを経て現職。主な著書『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで[第2版]』（慶應義塾大学出版会）、『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第3版]』（慶應義塾大学出版会）、『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに』（東信堂）ほか。大学教育学会第1回奨励賞受賞。